

～ セピア色の風景 ～

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

「田植え時季の親の姿
その2」

一方、お袋の仕事は三度の食事づくりと二度の「こじはん」づくり。夕食は晩酌が付き、男性は徳利の爛酒（かんざけ）、女性はぶどう液。幼い私はそのぶどう液を飲みたくて飲みたくてしようがなかった。朝食前が苗引き（苗取り）で、人夫はその日の必要な苗を引き終えると、わが家に戻って朝食となる。親父は、年々耕作面積を増やしていったので、一日で確保できた人夫の数にもよるが、一週

間から10日ほどが田植えの期間となり、同時に食事づくりとなった。

食事は、漬物の大皿を除き全て銘々皿だったので、その容器の数は相当の数だった。人夫の数は、食卓が縁側では足りず、納屋に簡易の食卓を作ったので、多い時で15人ぐらいいたのではないかと思う。時々、親戚などがお袋の応援に来てくれたと想像するが、覚えているのは忙しく動き回るお袋の姿だけである。

時代は移り後年、わが家にもいよいよ田植え機械が入り、手植えが無くなった（機械が植えられる田んぼの四隅植えは残ったが）。その時、お袋が

「あー、これなら、ご飯つづかなぐていい（つくらなくていい）…」とつぶやいた。そのとき、食事づくりに追われていたころの「あー、明日何つぐつべ」と悩んでいた言葉とともに、お袋の苦労を初めて知った。

毎年テレビで、機械による田植えでシーズンの始まりを見るたび、田植えの作業とは別に、親父とお袋の無心に働く姿が目につく。

あのころ、親が寝ている姿を知らない。

※：相馬地方の方言で、農作業の合間に食べるおにぎりや団子のような軽い食事のこと

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める